2024 年 6 月　園長だより

2024 年 6 月 21 日(金)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」
(旧約聖書　創世記 1 章 31 節・・・6 月の聖句より)

ID 論（インテリジェント・デザイン論）という考え方があります。これは、科学的な発想に基づく生命や宇宙の進化論に対立するものとして、1990 年前後に初期理論が形成されました。曰く、生命や宇宙の複雑さは、自然選択や偶然の変異だけでは説明できるものではなく、高い知性を持った（インテリジェントな）存在によって意図的に設計（デザイン）されたに違いない、とのこと。ようするに、科学的に未だ解き明かせない宇宙や生命の神秘を、極力宗教色を排しつつ、創造者の存在を想定した形で論理的に語ろうと試みたのです。2005 年には、アメリカのペンシルベニア州において、ID 論を公立学校の教育で取り扱うべきか否かを争う裁判が起こりましたが、結局のところ、なんだかんだ言って ID 論は、宗教的な発想に基づいているとの理解から、公立学校の科学カリキュラムに含めるべきではないとの判決が下されました。しかし、目下、ID 論は支持を得ながら精力的な研究が進められています。

「世界はどうやってできたのか」という天地創造に関する問いは、太古から続く重要な科学的かつ宗教的なテーマです。日本神話ではイザナギとイザナミが天の沼矛を使って世界を生み出したと言い、ギリシャ神話ではカオス(混沌)から、ガイア(大地)とウラノス(天空)が出現、その後、クロノス(時間)やオケアノス(海洋)が生まれた他、サイクロプスという単眼の巨人やヘカントンケイルという百腕の巨人などが誕生しました。ヒンドゥー教の神話ではブラフマー(維持)、ヴィシュヌ(創造)、シヴァ(破壊)という三大神が天地創造に関与し、マヤ文明では神々が言葉によって世界を創造した後、トウモロコシから人間が創られました。このように天地創造物語というのは、キリスト教や聖書の専売特許というわけではなく、非常に個性豊かに様々併存乱立しています。

私個人としては、「世界はどうやってできたのか」ということに関して明確な支持理論はありません。科学的に未解明な点を認めつつ、だからって ID 論は SF っぽいし、諸宗教の主張も荒唐無稽です。そして、聖書が伝える天地創造の物語も私は信じてはいません。・・・牧師としては極めて不適切かも知れませんが・・・。自分がこの世に生を受けた最初の瞬間について、誰も自分では知り得ないように、世界が生まれた最初の瞬間についても誰も知り得ないんじゃないかと。

ただ、それでも思うのは、6 月の聖句はステキですね、ってことです。世界がどんな風に出来たのか誰にも分からないし、別に分かる必要もないのでしょう。でも、間違いなく存在していて、今日も様々な出来事が生起している、この世界について 6 月の聖句は肯定的に語るのです。

ニュースを見れば決して平和ではなく、戦争が起こり、幼い子の命が失われ、病気が流行し、社会的・政治的な課題が山積している、この世界。ダメなところを挙げればキリがない、この世界。考えれば考えるほど、将来に対する明るい見通しは失われていきます。その結果、往々にして目先のことに意識を全振りしての、将来に対する思考停止が最適解になっていきます。

しかし、本来、この世界は極めて良いんだよ、と聖書は言います。6 月の聖書の言葉は、この世界を前向きに評価し、そこに生まれる全ての存在の価値を認めています。それは、否が応でも、この世界を生きる他ない私たちへの応援であり、私たちに対する神様のお墨付きでもあります。「この世界は、まだまだ捨てたもんじゃない」と、「あなたという存在も極めて良いんだよ」と教えてくれています。この先の未来を生きる子ども達にも、この世界が信頼して生きるに足ること、自分という存在がとても尊いことを知っていて欲しいと思います。そして、ちょっとだけ先に生まれた先輩として、少しでも「極めて良い」世界に近付けるよう、希望を失わず、考えることをやめず、良いと思われる選択肢を吟味、実践していきたいと願っています。